

シリーズ地域の再生 10

石田正昭 著

## 『農協は地域に 何ができるか』

2つの意味で、農協が地域社会にかかわることの重要性が増している。まず、農村部を中心に疲弊した地域が広がり、地域に密着した組織として、農協には積極的に働きかけ、地域を活性化することが求められている。また、農協の准組合員数は正組合員数を上回っており、農業に加え、地域社会全体の振興に関与することが、組合員のニーズに沿うという協同組合本来の役割になっている。

本書の魅力は、農協の組合員や役職員が、「農協は地域に何ができるか」という課題に対し行動するときに必要な情報や考え方を提供していることである。

まず、組合員や役職員は、農協はなぜ地域社会に関与すべきなのか、何をなすべきかを理解したいと思うだろう。

本書では、それは序章「農協は地域に何をすべきか」に整理されている。農協はどのような存在で、何をなすべきかについて、「協同組合のICAアイデンティティ声明」における協同組合の二重の目的や、社会的経済における協同組合の位置づけを紹介しながら、「共助・共益の組織から、共助・共益の組織ではあるものの公益をも配慮した組織へ」「『社会的経済』の一員としての協同組合」と位置づける。また、協同組合による「メンバー（組合員）以外の人々

にも役立つような公益的サービスの提供は、無条件に行われるべきではなく、協同組合のメンバーの承認する範囲内において行われなければいけない」との指摘は大変興味深い。

それでは、農協の組合員や役職員は、地域に関して、具体的に何を、どのように行うべきか。

行動の指針となるのが、第Ⅰ部「農をつくる」、第Ⅱ部「地域くらしをつくる」、そして第Ⅲ部「JAをつくる」である。これらは14章からなり、多くの事例が紹介されている。農協だけでなく、JAネットワーク十勝（第1章「合併しないで合併効果を生みだすには」）、美里ゆうき協同農場（第5章「農協と労協の連携で地域農業を活性化するには」）、アグリロード美和（第10章「女性部パワーで地域社会を活性化するには」）など、関連する組織も対象である。農協の事例も含めどれも魅力的で、著者の幅広い視野がうかがわれる。

そして、終章で、第Ⅲ部までの農協等の取組みを「組合員の幸せづくりだけでなく、地域みんなの幸せづくりに取り組んでいる」とし、さらに、社会的経済として農協がふるまうための条件等を示す。

本書は、現在の農協の抱える課題をさまざまな側面から切り出し、分析しており、地域社会との関わりという視点を越えた部分も多い。農協関係者、そして農協に興味を持つ多くの人に一読をお勧めしたい。

——農山漁村文化協会 2012年10月

定価2,600円（税別） 302頁——

（取締役調査第一部長

齊藤由理子・さいとう ゆりこ）